
短編集

いむい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集

【Nコード】

N7309X

【作者名】

いむい

【あらすじ】

短編集です。細々と書いた話をちまちま載せていく予定です。ガールズラブ、ボーイズラブの要素が入っています。詳しい注意は各話の前書きをご覧ください。特に注意がないものは普通の話です。
一部自サイトからの転載も含まれます。

太陽を憎んだひまわり（前書き）

ガールズラブの要素があります。
節食障害の要素があります。

太陽を憎んだひまわり

ああ苦い、口の中が酸っぱい。甘い匂いは大嫌い。あれは私の天敵である。甘い匂いをさせてる癖に何故腐ったみたいな味が口に広がるのだろうか。

私はそれを前に、なんとか笑顔を取り繕う。何度も見たくもない鏡を見ながら練習したのだ。完璧なはず。

「笑うな」

しかし、それは彼女に全否定された。ああ、死にそう。せつかく練習したのに。凄く凄く見たくもない鏡を見て練習したのに。

彼女は完璧な、神話に見る女神のような容貌に冷たい表情を乗せて私を見る。背筋が凍るように震えた。歓喜で。ああ、素敵。なんて顔をするの。

彼女のその宝石のような眼が私を貫いている。私をもっと見て欲しい、のに、絶対に見て欲しくない矛盾が生じる。

私は綺麗じゃないから、綺麗なキレイな彼女に見られる事に耐えられないのだ。

「ワケのわからない、変な笑い方をするんじゃない。気持ち悪い、笑うなら普通に笑え」

「笑ってるわ」

「笑ってない」

彼女は、私の前に鎮座する天敵へフォークを勢い良く突き刺した。また私の背筋が震える。完璧な、造形の手。

その手が、私に向かって主に小麦粉と砂糖とバターと乳製品の塊で出来上がった天敵の刺さるフォークを突き付けてきた。

「食べる」

耳を震わせる小鳥みたいな声が私に無体な命令を下した。ああ、死にたい。今すぐ死ねたらどんなに幸せだろう。

私は鏡を見ながら練習した笑みを浮かべた。今度は何も言わず、彼女は眉を寄せ、顔をしかめた。そんな表情すら美しい。

私は、ゆっくりりと、疲れない動作で差し出されたその手を見て、叫んだ。

「なんで!?!」

「ッ……!!」

叫ぶと同時に、フォークを吹き飛ばし彼女の手を取る。触ってしまった。どうしよう。でもそれどころじゃない。

使えない筋肉が悲鳴を上げた。腕を上げていられない。私は腕の悲鳴を無視して、彼女の手に誇らしげに収まる銀細工の指輪を取り上げて、床へ叩きつけた。それだけで呼吸が乱れて心臓が脈打つ。

「ムカつく!!」

泣いてしまいそうだった。彼女はただ顔をしかめて私を見ている。もっと見て。見ないで。

「いきなり、何するんだ」

「どうして、私は指輪じゃないの!」

叫んだ。肺が悲鳴を上げた。

彼女の指輪にすら、私はなれないのに、当たり前みたいに彼女の指にはまる指輪が許せない。

泣いてしまいそうだ。けれど泣いたらまた病院送りだ。ようやく

あの白い部屋から抜け出してきたのに。

彼女は肩で息をする私を静かに眺めて、天敵を今度は自らの指で突き刺した。そのまま私の口元へ運ぶ。

「食べる」

言いよのない怖気が背筋を走り、私は何とか立ち上がった。そんな事出来る筈がない。ヨタヨタと歩いて、もう一度フォークを取りに向かう。

疲れるなあとぼんやり思いながら二歩進んだ所で、体が回転して倒れた。腕が鈍く痛い。

気が付くと、鼻につく甘い匂いと、甘い指。

「飲み込みなさい」

私は彼女の指を食んだまま、玩具のように頷いた。ああしぬ。むしろしのう。

私の喉が動いたのを見て、彼女は笑った。私は部屋の鏡を叩き割りたくなった。

彼女はそれで許してくれて、天敵で濡れた手を洗いに行く。

彼女が見えなくなった途端、天敵が私の口を汚した。

吐きたい。

吐きたい。

吐きたい。

吐けない。

了

ブルース プリンゲ（前書き）

薄くボーイズラブの要素があります。
視点は女性です。

ブルース プリンケ

緊張した面持ちで大学からの友人は佇んでいた。まだ梅雨入りはしていない六月の初旬。荘厳だか騒々しいんだか判断がつかない音で鐘が三回鳴った。

私は小さな教会の端っこに、これまた大学からの友人である男と一緒に座っていた。

「例えばさ、あいつが逸香みたいに女の子だったら強引に犯して孕ませて、俺だけのもんになんて出来たのに」

まだ少し騒々しい教会で、彼の周りだけ空間を切り離れたみたい。な静寂があった。

彼はそれを壊す事もなく、合わせた両手で口元を隠しながら小さく呟く。

私はその意味をこの場にいる誰よりも正確に理解出来るからこそ、片眉を上げてわざとらしい表情をまとい彼の作る静寂な空間に潜り込んだ。

「健ちゃんそれサイテーの考え方だよ」

「なんでよ」

「愛のない関係なんてムナシーだけだもん」

私は彼に向かってありきたりな言葉を吐く。

彼はほんの少しだけ私を誤解している。

私の口調はわざとそうしているだけで、私はそんなに優しくはない。

「愛ねえ」

彼は気のない、吐息のような短い音を紡いだ。

切り離れたような彼の持つ空間に、私は石を投げ込む。

「好きでもない男の子供なんて最悪。例えば彼が女の子だとして、そんな事されたら死ぬか殺すか逃げるかするよ」

「そりゃ困るな。死なれても逃げられても俺は泣く」

「でしょー」

泣きそうな顔。

そんな事出来る訳がない。そんなのは誰より彼が理解している。

痛ましいような、憐憫を募る言葉に私ははつきりと否定を突き付けた。

彼は、今日この日、ただ一人を除き誰からも祝福されながら他人のものになる男に、長いこと恋をしていた。

多分、それを私だけが知っている。

「ああでも……殺されんのはいいかもしれない」

「えー？ 健ちゃんブッソー」

「もういつそそんな気持ちよ。どうせ叶わないんだから、俺の凶暴なこの気持ちと一緒に」

殺して、くれたら

音にならなかったその言葉の最後を、私は正確に理解した。

何もかも白い教会の中の端っこの、青く寂しい空間。

彼の持つ濃密な空気は肩にのしかかるようで、私は指先をいじりながらどうしようもなく隣に座っている男を苛めてやりたくなった。

「……なんかさ」

気合いを入れて塗ったルージユが渴いているような気がした。

舌先で湿らせるとほんの少し苦い。

「健ちゃんって中学生みたいね」

「なにそれ」

莊嚴なんだか騒々しいんだか分からない音で、また鐘が鳴る。バツクに控えていた音楽隊がささやかに賛歌を歌い出した。

私達は周囲に合わせて立ち上がると、父親に手を引かれ静かに入ってくる新婦に目を奪われたように立ち竦む。

一瞬隣の男を仰いだ。

迷子のような顔をして、ヴァージンロードを進んでいく純白の女性を見つめていた。

「純粹過ぎて見てて痛い。恥ずかしい。猥褻物陳列罪で訴えたい」

「お前ね」

静寂のヴァージンロード。白いドレスの清廉な女性は、父に手を引かれて悲痛な面持ちで進んでいく。

嘔吐き。

私は叫びそうになった。

静寂の教会。隣にいる背ばかり高い瘦躯の男は、無理やり祝福の表情を浮かべている。

嘔吐き。

私は叫んでしまいたかった。

「キラキラのピュアピュアなのね。ブルースプリングね」

「ぶはっ、青春ってか」

彼は小さく笑った。ああ、なんて顔をするのだろう。

汗ばんできた手のひらを強く握り込んだ。収納力のまったくないお飾りの小さなバッグが軋む。

「いい歳こいて、いつまで引きずるの？ そんな綺麗なもの、その歳まで持つてるから動けなくなっちゃうのよ」

「綺麗ねえ？」

私の言葉に、彼は首をささやかに傾ける。

「そんなお綺麗なもんじゃねえのよ」

自嘲する声が、私の耳だけにどうしようもなく痛い。

私は段々と早くなっていく鼓動を持って余し気味に浅く呼吸を繰り返した。

純白の女性は、純白のタキシードに身を包んだ彼の隣に収まる。

難しい顔をした花嫁の父親は一番前の席で静かにその表情を隠した。

「怖くて怖くてしょうがねえ。多分俺は、あいつが女でも強引に犯して孕ませてなんて事は出来なかったんだろうな」

「健ちゃんはチキンだもんね」

神父が口を開く。

祝福の空間。

どうして、全てが身を切り裂く程に鋭いのだろうか。

隣に大人しく収まる男を、私は苛めて苛めて苛め抜いてやりたい。

「そう。鶏肉なの。口では色々言っても結局動かないまんま、大人になった経験と中坊ん時の妄想力で頭の中だけであいつをぐちゃぐちゃにしてる。中身なんかドロドロだ」

そうしてもう許してくれと懇願したこの男を神父の前に突き出してやりたい。

「もう最悪だよ。ぐちゃぐちゃにしてよがらせて、俺なしじゃダメな身体にしてって……そんな妄想ばかりよ、俺。そんで本物じゃ満たされない心を満たすんだ」

それは懺悔だ。

大学入学から今日までの凡そ八年間、彼が抱えてきた、私だけがその欠片を見つけられた彼の秘密だ。

もどかしかった。

やるせなかった。

私達は、私は、今ここで何をしているのだろう。

「罪悪感で一杯になりながら？」

脳味噌が沸騰している。私は感情に任せたまま言葉の刃を彼に向けて続ける。

「……お前は怖い女だな」

「誰でも通る道でしょ。健ちゃんが勝手にそこで止まってるだけじゃない」

静寂の教会で、神父が分厚い本の一節を読み上げるように、重厚な声を出している。

もう何度か聞いた台詞だ。

あと少ししたら、神父の前の二人は誓いを立ててしまうのに。

「やっぱり健ちゃんは、キラキラのピュアピュアマンね」

「なんだよ」

「中身がドロドロなんて嘘よ。彼が好きすぎて、彼に欲情する自分を許せないんだわ。でも自分のものにしたいから、板挟みになってるの」

どうしてアナタは、ただ黙ってそこに居るの。

「怖い女だ。こんな日に俺を暴いてどうするつもりだ」

駄目、早く。

焦りが私を支配する。

鼓動が速い。手に汗が滲む。

この日を逃しては駄目だ。これは彼にとって最後のチャンスなのだ。

「大人の階段登っておいでって、ピュアマン健ちゃんを誘惑してるの。アタシが持つてるのは赤い毒リンゴね」

私にとっても、多分最後のチャンスなのだ。

「殺されにこいつてか」

「そつよ」

「怖い上に酷い女だ」

「バカは死なないと治らないでしょ」

「悪魔め……」

小さく、彼は呟いた。

「大人の階段登って、ピュアマンからシンデレラマンに変身しなよ
健ちゃん」

走って！

私は強く願う。

「ふはっ、どんだけ乙女だ俺は！」

軽快に笑った後、彼は誓いを立てた二人を後は静かに眺めていた。

その誰より清廉な横顔を、多分、私だけが、真っ正面から眺めていた。

end

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7309x/>

短編集

2011年10月21日02時07分発行